



# 仲間と共に



令和4年度 <三輪南小 学校だより> 令和5年1月30日

## 「教員という仕事」

校長 小野木 義浩

教員という仕事は、とても魅力的な仕事です。大切な子供たち一人一人の成長に関わることができ、工夫して指導すれば、その成果が子供の表情や言動として直接的に感じることができます。子供が自信をつける経過や伸びを目にすると本当にうれしく思います。

しかし、マスコミなどで報道されるように、現在、日本では「教員のなり手が減っている」「若い人が教員という仕事を希望しない」という状況となっています。岐阜県でも同様の傾向があります。とても残念で、心配しています。「教員という仕事は多種多様な仕事が多すぎるブラックな仕事」「残業代は0円で、24時間働かせ放題」などと揶揄されることも影響があるのでしょう。

わたし自身、教員になってからしばらくは、「子供のためなら夜遅くまで残って仕事をしていても気にならない。それが当たり前。」などと「夜遅くまで残って仕事をしている人がよい先生であり、熱心な先生」と勘違いをしていました。周りの雰囲気も同様な傾向があったようにも思います。しかし、教育現場では精神疾患などで教員の休職や退職者が増加していることも大きな問題となってきました。

現在、社会の流れの中でどの職種でもこれまでの働き方を改善しようと「働き方改革」が叫ばれています。国の中央教育審議会「学校における働き方改革」答申には、次のように書かれています。

「・・・子供のためであればどんな長時間勤務もよしとするという働き方は、教師という職の崇高な使命感からうまれるものであるが、その中で教師が疲弊していくのであれば、それは子供のためにならない。教師のこれまでの働き方を見直し、・・・自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになることが学校の働き方改革の目的・・・」

三輪南小学校では、教職員は「心身ともに元気な状態で子供の前に立つ」「時間を工夫して生み出し、子供と向き合うために、わかりやすい授業づくりのためにつかう」「自分自身の生活を大切にする」を意識しています。本校の教職員の勤務時間は、午前8時から午後4時30分です。その中で、工夫してできることを精一杯やって勤務しようとしています。

そうはいつでも、仕事を持ち帰ったり、帰りが遅くなったりする教員です。時間を意識する手立ての一つとして、他の学校同様に留守番電話を活用しています。数年前までは、遅い時間であっても、学校の固定電話に連絡すれば教職員が対応していました。「忘れ物をしたので、これから取りに行ってもいいですか?」「明日の時間割を教えてください」「帰宅後、遊びに出かけてまだ帰ってこないのです」・・・

教員は子供の学習面・生活面、人との関わり方や基本的な生活習慣などの指導をし、緊急時にはもちろん一生懸命対応をします。教員という仕事の特性上、商店や銀行のようにシャッターを閉めて、「本日の営業は終了しました」というわけにはいきません。働いている保護者の皆さんと連絡を取ろうとすれば、当然、勤務時間外になります。しかし、勤務時間を意識しなければ、以前の働き方と同じです。教員が元気に明るく勤務するためには、以前のやり方からの改革や工夫が必要です。家に帰れば、教員一人一人にも家族がいて、日常の生活があります。その生活を大切にしながら、できるかぎり勤務時間内で最大の効果をあげるように工夫できる教員こそ、わたしはよい先生だと考えます。

これからは、「学校がやること」と「家庭がやること」「地域が受け持つこと」などを明確にし、お互いに意識して、今まで以上に、限られた時間のなかで学校と家庭・地域で力を合わせて子供に関わることが求められます。「教員としての仕事」が若者にとって魅力的で、やりがいがあり、働きやすいと感じられる、そんな仕事と言われるようにしていきたいです。